若い日本人たちがハルダンゲルヴァイオリンに着手する

４０人の若い日本人が日本でハルダンゲルヴァイオリンを勉強しています。その中の２人がハルダンゲルとヴォスの一流の奏者に会って技術を磨くチャンスを得た。

矢野小百合さんと山瀬クリスティーナ静香さんは楽器を調弦してクヌート・ハムレ先生と一緒に一曲演奏した。この２人の若い女の子たちは二週間かけてハルダンゲルの全ての市を訪れ、全てのカルチャースクールにも訪れ、いくつかのコンサートにも出演する。しかし一番重要なことは地域のプロの奏者からハルダンゲルヴァイオリンを習えるということだ。これをノルウェー人の父を持ち、ドランメンで育ったクリスティーナがいう。

パイオニア理桜さん

２人の若いハルダンゲルヴァイオリン学生たちが山瀬理桜の名前をあげるのは早かった。東京でハルダンゲルヴァイオリン学校ができたのは彼女のおかげなのである。ここでは彼女自身が教師として活動し、ノルウェーの国民的楽器を教えている。山瀬さんはまたハルダンゲルと日本の間の文化と旅行の交流に取り組んでいる日本ハルダンゲルクラブのリーダーでもある。
小百合さんは日本のラジオでの理桜さんの演奏を聞いてすっかり魅了されたと語る。そしてそれを習いたいと申し出たのである。クリスティーナさんは日本で理桜さんの姪であり生徒である。山瀬理桜さんはクラシックのヴァイオリニストであるが、グリーグの伝記を読んだのをきっかけにハルダンゲルヴァイオリンのことを知り、この哀愁のある美しい楽器とそれを教えてくれる人の探索が始まった。そして１０年ほど前に東京でアンビョルグ・リーエンさんの演奏を聞き、その後はヴォス出身のハールヴァール・クヴォーレさんからハルダンゲルヴァイオリンを習った。
今日山瀬さんはこの実績を彼女の若い生徒たちに継承している。そしてその中の最先端の生徒が小百合さんとクリスティーナさんなのである。

曲を習う

「プログラムはウレンスヴァングで始まり、私たちは最初ヒェル・ビートゥーストイルさんに曲を習いました。今回の留学で一番素晴らしいことは現地の奏者に直接習うことができることです。日本ではノルウェーの奏者に会えないからです。そして、ノルウェーの空気感の中で２週間過ごせるということはとても素晴らしいことです。このことを可能にしてくださった全ての方々に感謝しています。」
とクリスティーナさんはスポンサーの名前をあげながら言った。

-どのようにしてハルダンゲルヴァイオリンに出会ったのですか？
小百合さんは既にクラシックのヴァイオリストとして仕事をしていた。
「私は理桜さんがハルダンゲルヴァイオリンをラジオで演奏しているのを聞きました。その音色がすごく優しくやわらかくてとても好きでした。そして理桜さんにメールを送り、この楽器を教えて頂きたいとお願いしました。しかしはじめてみたら演奏するのがすごく難しい楽器で、一番大変だったことはやわらかく演奏することで、優しく弾かないと音色がよくないのです。」と小百合さんはいう。
クリスティーナさんはノルウェー人の父を持ち、ドランメンに長年住み、１２歳の頃に東京に引っ越したのである。山瀬理桜さんは彼女の叔母であり、クリスティーナさんは彼女から影響を受けたのだという。
「最初山瀬理桜さんに影響を受け、ハールヴァール・クヴォーレさんからノルウェーで始めました。しかし大部分は山瀬理桜さんから日本で習いました。」
２人の若い日本人たちはエドヴァルド・グリーグを日本の観客とノルウェーの民族音楽の間の架け橋としてあげている。
「ウレンスヴァングでグリーグが作曲したお家を見ることができたり、彼を魅了したハルダンゲルフィヨルドを見られたりしたのは大変素晴らしいことでした。日本ではグリーグの音楽を知っている人はたくさんいます。」とクリスティーナさんはいう。
「しかし彼がノルウェー人であるということを知っている人は少なく、ましてやハルダンゲルヴァイオリンの音楽に影響を受けたという事実はほとんど知られていません。そして日本では山瀬理桜さんはこの事実と同時にグリーグがドビュッシーやラベルなど近代フランス音楽に影響を与えたことを紹介しています。今私たちがしていることはグリーグなどクラシック音楽に関係しています。だからグリーグが音楽を生み出した場所にいられることは嬉しいです。」

ハルダンゲルヴァイオリンの宝庫

オールブルアカデミーの中のある部屋にはたくさんの古いハルダンゲルヴァイオリンがある。そのほとんどはシグビョルン・バーンホフト・オーサが弾いていたものである。
他にもオーレブルアカデミーが所有している楽器も多数保管されている。これらの多くは貸し出され、使用することによって良い状態を保っている。小百合さんとクリスティーナさんはグンナル・ストゥーブサイド校長の説明と楽器の閲覧に目と耳を傾けていた。
このハルダンゲルヴァイオリンの宝庫の中には２つのボトネン・フィドルが存在する。これは 1600 年代から 1700 年代にかけてイサーク・ボトネンが制作したものと、彼の息子のオラフ・ボトネンが制作したものだ。この２つのフィドルは「ボトネンの薔薇」という CD の録音のときにクヌート・ハムレさんやベネディクテ・マウルセスさんが使用した多くの古い楽器の一部である。

彼女たちのオーレブルアカデミーの訪問にあたって、ストゥーブサイド校長はアカデミーのハルダンゲルヴァイオリン製作所でハルダンゲルヴァイオリンの扱いについての説明を行った。２人の若い日本人はメモを書いたり、写真を撮ったりして、このハルダンゲルヴァイオリンの宝庫にすっかり魅了されていた。

東京ハルダンゲルヴァイオリン学校

クヌート・ハムレさんは彼女たちが留学中に出会う先生の一人だ。そして彼とフランク・ローランドさんとオーセ・タイグランドさんが奨学生を決める審査員に含まれていた。
「審査員は７人の演奏の東京での映像を見たのです。そしてその中から２人選びました。それは難しい審査でした。なぜならレベルが全員高かったからです。でも今回招待された２人がとても上手だったので彼女たちに決めました。」とハムレさんはいう。
-彼女たちの弾き方に何か日本的なものを感じますか？
「それはとても興味深い質問ですね。日本人のノルウェーの伝統音楽の弾き方に特に変わっているところは聞こえません。しかし、私たちにとっては少し不思議ですが、彼女たちは文化をとても尊重する心をもっている感じがします。詩にしても音楽にしても。彼女たちはハルダンゲルヴァイオリンの音楽もそのように扱っていると思います。」と、日本でのハルダンゲルヴァイオリン学校に驚いたというハムレさんはいう。
「日本にハルダンゲルヴァイオリン学校があって、４０人の若い日本人が私たちの音楽をマスターしようと頑張っているということはとても驚きです。そして同時にそういうことが行われていることは大きな喜びです。そしてこの若い日本人と数日間一緒にいられるのは素晴らしいことです。」